

松村武雄 著

日本神話の研究

池田 源 太

一

松村博士は、昭和廿九年三月、『日本神話の研究』の第一巻を刊行して後、卅年の一月には第二巻を、同年十一月には第三巻を、そして卅三年の六月には第四巻をと、次々に刊行して遂に年来の大著を完成した。博士の神話学の高層建築はこうしてここに竣工を見たのである。然しここに到るには、博士自ら言っているように、『神話学原論』・『古代希臘に於ける宗教的葛藤』・『宗教及び神話と環境』という、この四巻本にも劣らぬ労作が、基礎になつていたので、この『日本神話の研究』を充分理解する為には、これ等に言及せなければならぬのであるが、今ここには触れる余裕がない。

四巻を大別すれば、第一巻が序論で、二巻・三巻が本論で、四巻が結論となる。その序論には、古典神話の全体的性質を先ず把握して、個々の研究の指針としようという趣旨があり、比較的に歴然と露呈している共通相を把えている。而してその本論とは、天地開闢から神武天皇直前までの記・紀に示された神話群を逐次検討したも

ので、博士が、「最も執心し、且つ力を注」いだ所と自ら言っている所である。そしてその結論とは、本論から導き出された通観的な記述で、①心的には、日本人の靈格観・宇宙創成観・宇宙形体観・異族意識等を、また、②外面的生活では、家族的・氏族的・国家的諸制度、及び母系制から父系制への、末子相続制から長子相続制への推移、婚姻制や狩猟経済や農業経済等の事を扱っている。

二

博士は第一巻に於て先ず、記・紀に示された日本古典神話が神話として考えられるか否かの問題を取上げ、日本のそれは「俗性的」であるが正しく神話と目されることを認め、次には、古典神話が為政者の作為とする説に反対し、民族の抱く宗教的な信仰・儀礼から生れたものがあるとし、従つて勿論それ等の説話を史実と見る考に反対している。

その發達過程に関しては、「民族發生説」を否定し「官撰説」を採つたが、それは、あり来りの官撰説ではなく、「日本にうごめく雜然たる神話群」を考え、北方民族と南方民族の持つ神話群の雜然たる併存が、天皇氏の神話圈を基本に結集し整理せられたという意味の官撰説である。日本神話の宗教性は寧ろ量的・強度的に小であるとし、歴史的・政治的色調では特に異色があり、血統的・系譜的性格の強さがあり、従つて比較的完全に入人性・人格性を具備した神々が配せられて見ている。

次に博士は、日本神話の資料としての記・紀についての充分精密な検討をなし、更に古語拾遺・祝詞・風土記・万葉集・旧事記・神

道五部畫を順次吟味し、更に、後代の文獻・民間伝承・異国異族の説話習俗信仰、並びにこれに関する文獻を、「次善的研究資料」として、その中から遺珠を拾う道のあることを論じた。また、「取らんとする研究法」については、日本神話を「国民神話学的」見地から取扱う立場を取ることを明かにし、研究の「王道」として第一に民俗学的、第二に人類学的及び民族学的研究法を取ると明言し、取扱いの型については、内深法と外伸法とを併用するといつてゐる。

三

第二巻の個分研究の上は開闢より三神分治までを扱つてゐる。

〔第一章〕創世神話では、紀の記述の借用・非借用を論じ、「纂修者たちの心懐からすれば、我々の考よりも借用感が稀薄で自國感が濃厚であつた」と見てゐる。博士は世界の開闢神話を化生型・創造型・生成型・啓發進展型の四に類別し、我が國のを以て「啓發進展型」とし、ニュージールランドのそれに近似してゐると見た。高天原の問題は、造化三神との関連に於てのみこの事があるとし、三神中、高皇産靈尊のみが、民族文化の中で生きてをり、日本民族の主要構成要素の一としての北方民族が、この神を高天原の神とし、且つ祖神としたと考へた。また國常立尊から禰生神群に至る系統を、造化三神の説述を以て初まるものから分けて、それぞれ諸神の内性・職能を検討した。中に就いて、高皇産靈神と神皇産靈神が同じく「むすび」の觀念の神格化と見られ乍ら、前者は多く破壊・戰闘の面に関与し、高天原系神話に活躍し、後者は、生成・建設の面に著われ、出雲神話にのみ現れることを指摘したことが注目される。

こうして、博士は「第二章」諸・再二神に関する前論の中で、二神が創生神話中の正当な人物でないことを考へ、「神らしい実在の人」であり得ないとし、天空と大地とに係わる靈格と觀ぜられたと結論した。「第三章」これに続く國生み神話では、天神の命を受けてゐるか否かの問題から初め、古い日本民族を以て、ミコトモチの強健な信仰者として特色づけた。そして二神の場合は、漠然とした詔命があるとし、皇孫降臨神話とパラレルのものとして理解しようとしてゐる。「天浮橋」は高い岩石から思いついた天への梯の觀想と見、「目凝島」については、「塩こりて島となれ」の意をこめた呪的な唱え言と関連があるとした。また天御柱及びその回旋は要するに婚姻儀礼がその背後にあるとし、胞については、守護靈としての胞の説話的な呈示があるを見た。そして、淡路島が日本神話に於て持つ重大な役割については、淡路島と海人との関連を考へしめる歴史事實が反映したとする点の一つの特色を持つてゐる。次には、大八洲生みの諸伝の新旧について精密に検討し、記の所伝がやや新らしいと結論し、ことに知阿島を含む伝は、記の所伝以外になく、この伝と遣唐使の制との関連を考へた点また異色がある。國生み神話發生の心理については、八十島祭の実修に於て経験される、「國魂の神を皇孫に隨順して魂を捧げしめよう」とする心理に通ずるとし、他民族の神話に見出せない所とする。その成立過程と時期については、大和を中心として、東北ないし東を背にし西に伸びる傾向を持ち、天孫系民族が大和地方に行政的・文化的中心を樹立した時代、若しくはその後とした点特に異色がある。

〔第四章〕國生みに次ぐ「神生み神話」については、記の敘述の

精緻を取り上げ、「国生み」は超国家的、「神生み」は国土に即した観想を示すとした。迦具土神の出生は、噴火現象による大地の大破壊を示すと解し、その後の諸神の出現は、水・雷・岩・山等噴火現象の結果する物凄い諸相への反応ないし回想と解した。〔第五章〕
諸神黄泉国訪問神話については、一般に古墳聯想説を肯定し、特に、日本古代民の洞穴生活時代があると考へた。古代日本人に取つては、黄泉国の心像は粗樸で且つ、恐ろしいというよりは、醜穢な世界と観せられた点、日本神話の「特色」をなすと見た。〔第六章〕「黄泉戸喫」の原義には、地方の結婚儀礼に於ける「飯食」・「口首尾」・「客入朝に於ける「共食」・記の「葦結」に通ずるものがあるとし、喜界島の民俗行法中に類似の観想形態を見出している。また二神の「事戸渡し」には、「言い勝」・「言い負」という普遍的な諍い呪法の実修がその背後にあると見た。〔第七章〕諸神の禊祓神話では、古代日本人の禊祓に対する熱意の度合の他民族に比べてことに強いこと、その後の諸神生り出での形が系譜的性格の強いものとして特色あることを指摘した。また、ことに上・中・下三瀬の三分段型の実修が呪儀、特に海人族に出自する呪儀と関連あることを考へた。

〔第八章〕日神・月尊・素尊三神出生分治神話に於ては、④諸・再二神の国生みの最後に生れる胎生神となす紀の本書の伝と、⑤諸神の禊祓による化生神とする紀の一書、及び記の伝とに分け、④伝承の先位性を認めた。そして素尊を除外した二神、ことに天照大神と諸神とを血統づけることが、天皇氏神話圏に本然であるとし、三神の出し方については、日本民族が偶数を重んずる民族であり乍ら三を一の円満数と観する点では奇数を重んずる民族と揆を一にして

いると見ている。天照大神の性格には太陽神的な要素よりは、祖神的な要素に重心があるとし、なお他に司靈者的・巫女的な相の隠見するのを認めた。月尊の名義には、夜の支配者というよりは、ことに農耕に須要な太陰に基づく時の「測定者」の靈格を見たが、日本神話に於ける月神の存在の貧弱性を指摘し、これは、日神が祖神としての強い性格を持つことの影響と見ている。素尊の名義中の「スサ」は地名とし、三輪族が篋笠をつけて神泉苑を円舞する呪舞形態の存したことを素尊の故事によるとする、体源抄の記事によつて、この儀礼を rain charm とし、この事から素尊を雨・水・農耕に関連ある神とし、更に、祖神・造化神の性格があるとした。

四

第三卷個分的研究の下は、天岩戸籠りを以て初まり、豊玉姫出生神話に終つている。〔第九章〕先ず大神と素尊の同胞問題から初め、元来二部族ないし二民族が、無関係に生み出した二神を、後期的に同胞として結びつけたものとし、「天岩戸籠り」の解釈については当然最も大きく扱つている。日蝕説を初め諸種の説を検討し、結局鎮魂的・笑ひ祭的性格を持つ祭儀と解した。次に、〔第十章〕主食神殺しの神話では、先ずその国籍を取り上げ、結局日本自生説を取つたが、この神話の構造・内容・神話中の位置等について著しい混乱があることを指摘し、遂に、日鮮語上の一種の言語的遊戯となす説に有力な根拠があるとする考に傾いている。〔第十一章〕八岐大蛇退治に関する諸説を検討したが、「退治」前の相を見るべきであると、祭儀に於ける八処女の巫女性を捉え、御饗招きの巫女が、

聖座に即いて、水盃たる神を招ぎ迎えてこれを饗する姫を考え、一方田の神の妻「オナリ」が、遂に田の神の犠牲となる民俗との近似を認めた。素尊については、八岐大蛇と double たる関係にあるとし、水神を招ぐ巫人は、半ば意識して他の水神素尊を迎え饗したと見ている。素尊の足名稚・手足稚の許への出現は、出雲民族の化外の民との初接触を標徴し、素尊の大蛇退治は、進出族と化外民との持つ二つの水神・作物神の重なりを示すと見た。

また、宝剣が蛇尾より出る事については、我が国常民の信仰の中に、谷川等に水蝕作用で出来るポットホールが、龍蛇の尾の剣によつてすりへらされたとする所謂「りうずり」の信仰があるのを取り上げ、この大蛇の宝剣を継承するのは、大蛇と double である素尊が最適者と見、それによつて国魂を己に体することが出来たとするのである。

「第十二章」出雲神話の造化神は、素尊の中にも隠見するが、一般に水平表象による「渡り神」又は「出現神」であるとし、神話体系の融化過程に於て天孫系民族が整序者の地位に立つため、出雲神話は首部を失つて、大國主神を中心とする神話群が天孫神話圏と結びついたと考えた。そして大國主神の性能は、専ら国土の造営に係わる文化的英雄神、而も諸・再二神の国生み、国造りとは別個に国造りを使命の主調とする神とした。その上、妻覓ぎに於て、子福者として、称呼の多い点で、また、国霊神・文化神・武神・医療神・農耕神等その職能の多岐である点、他の神々の追隨出来ない所であることを指摘した。そしてその性能の多岐は、回想ないし民間記憶

の一種の複合的な重ね写真であるとした。大國主神・須勢理姫神話

の高度の複合性については、主要部に著しい成年式儀礼性があるの
で、本然的にはこれを母胎として生れたとし、終末期の服役婚性をも認めた。

そして、成年式儀礼の司会者の「まれびと」を素尊としている。素尊が課した試練の野焼は、寧ろ成年式的で、大國主神が二度までも死の運命を負うのは成年式の過度儀礼であり、成年式儀礼の諸条件を充分具えているが、然し我が古文獻ではこの儀礼の実修の詳密記述に欠けていることを指摘した。

「第十三章」少彦名命については、大國主神の脇役としての一機構をなしているとするが、その内性は本然的に靈魂であり、大己貴神の靈魂たる大物主神と同一存在態である点で、大己貴神の靈魂とする。「第十四章」國譲り神話については、相異なる意図・目的を持つた物語を打つて一丸としたものである為め、伝承上の混乱や不調和があるとし、その史実性については、「架空的想像でもなく、特定の史実の説話的表現でもない」、「相当の年月の間に高天原系民族が他を包摂して行つた事実の龐ろな大観的・綜約的な回想の神話的表現」と見る。記・紀の記述と正反対の異説を、「出雲國造神賀詞」が含んでいるのは、遠い昔の事で、出雲の異説は既に万人の公認を受けていた、という吹田氏の説を認め、その上に、「出雲臣族」と「出雲神族」の間に微妙な差別のあつたこと、神賀詞に呪能的なものがあつたという理由を添加している。

「第十五章」天孫降臨神話については、亜細亜大陸の北方民族系民族の所産とし、國譲の神話とは関係が無いと見る。そして天孫を降臨せしめる靈格のうち、高皇產靈神を觀するものが原初的で、天

照大神とするものを後期的とした。その歴史性については、「作られた」ものでなく、「生れた」ものと考え、北方民族に共通な文化コムプレックスの一特徴とする観念・信仰の日本に於ける現われとし、日向の地としてあるは、朝日・夕日の照り栄えに対する、「国ほめ」や、「日向い儀礼」等の実生活上の民俗にあると考えた。「第十六章」瓊瓊杵尊と木花咲耶姫の婚姻神話に於ては、木花咲耶姫・磐長姫の二女性を含めての物語は、本原的には、瓊瓊杵尊を中心とする神話圏外の他からの附着物であると見る。然し本原に於ては、尊と鹿茸津姫との婚姻神話があるとし、更にその背後に、ボン族の神話——バナナと石とを対比させて、その一を取り他をすてたため人の寿命が短かくなつたと説く推原神話——があると考えようとしている。「第十七章」海幸・山幸神話については、浦島説話との接近よりは、南洋系の説話に類同することを取上げ、数種の南洋説話を検討し、漁艱具貸借・復報の話根が顕著な海洋型（A型）と復報の話根を含まぬ山野型（B型）に分け、そのA型に属するとした。一方この神話が海人族・隼人族と関連あることに注目し、インドネシア地域より伝播したと考えた。「第十八章」豊玉姫出産の神話の本幹部をなす禁室型説話を取上げ、「搜神記」のそれに類同するものを見出し、その上にト・テミズムの色彩、並びに外婚制の面から扱われた際に、この神話の謎がよく解けると考えている。

五

第四巻の総合研究篇で先ず取り上げたのは、「第一章」日本古典神話の終末を神武天皇直前とすることの論で、次には、「第二章」①

高天原 ② 出雲及び ③ 筑紫系の三神話の特徴を考究して、①には、北方系要素・太陽系要素・食養経済に於ける狩猟性の著大・同農業の劣勢・垂直表象の高度を挙げ、②には、水・雨に関する靈格、並びに農業神、蛇性的靈格の豊富、水平表象・地下的要素の顕著があり、③には、南海と九州の人種的・人文的関係を示唆する事実のあること、海洋的・南方的要素の顕著を取り上げた。そして、この古典神話体系の中に、この三民族の宗教的葛藤を觀取した。即ち、中央朝廷の異族・豪族の咒能・宗教力の利用とともにその圧制があり、これに対する出雲系民族の宗教的反抗の兆として、一言主神の奇異なる示現・出雲大神及び阿麻乃弥加都比女、並びに大物主神の祟りを取上げた。また、筑紫系民族の宗教的反抗の兆としては、宗像神の雄略天皇征韓の阻妨、同神の顕宗天皇太后への祟り、住吉神の仲哀天皇への祟りを挙げた。「第四章」古典神話に於ける靈格觀については、チ・タマ・カミによつて呼ばれる三を考え、その観念・信仰を論究した。

そして、チは、野稚神や水蛟や久久能智（木神）に見られ、タマには諸神の荒魂・和魂、鎮魂祭のタマがあり、タマは、人格的・人間的なカミとなる傾向があった。そしてチ若しくはタマそのものの進展・昇華からカミが生れるのではない点でチ及びタマに対してカミの発生上の関係は無いが、同じように超自然的な勢能を有する存在態である点では決して無関係ではないのみならず、カミはチまたはタマを活躍させることのある存在態であることを検出した。

博士は更に「第五章」靈界に関する考究をなし、高天原・黄泉国・根ノ国・妣ノ国・常世國・わたつみの國等についてその性格を詳述

とした。

六

以上は、「日本神話の研究」に於て、松村博士がのべようとする結論だけの大要である。ほんとうはしかし、これ等の結論がどうして出たかの大凡の経過をも紹介し、その当否を論ずべきであるが、ここには色々な意味で、その余裕を持たない。

ただ博士は現代日本に於けるあらゆる意味に於ける学問の最高峯を示す一人であり、古稀にして而も学究的情熱が熾んであり、この数十年來、少しも休むことなく、次々と新しい研究を發表している事實を見て、我々は、学者としての人間の可能性について、ただ不思議であるという以外の言葉を知らないのである。

まず、それぞれの問題に関する先人・後人の研究の成果を夥しく蒐集し、一々これに検討を加え、その論旨の長短を指摘・吟味し、採るべきを採り、棄てるべきを棄てている態度の分明さ、そしてその範囲についての遺漏の無いこと、まことに学問の藎奥を極めたというべきであろう。日本に於ける記・紀を初めとする古典の解釈のほとんどあらゆる論考に眼を通してある点で確かに日本古代学の一つの集大成であり、日本の文献的神話の学問の決定版の感が深い。その上、神話と関連ある限りに於ての日本の民俗的事実を多く取り入れている点、博士の従来の著作に多く見られなかつた所で、ここには、博士の神話学の新しい発展が見られる。また博士は、神話学を支持する歴史的事実に眼を向けている点、これまたその論攷の客観性を増強している。例えば、海人・隼人の事については、屢々

した。続いて、「第六章」神話に於ける狩猟・漁獲經濟の事を取上げ、猟具・獵法を古文獻から徴し、狩猟經濟活動に胚胎する呪術的・宗教的實修の事實を見、次には漁獲經濟についても、漁具・漁法、及び漁獲活動に関する呪術・宗教的實修について考究した。「第七章」農耕經濟に於ては、農具・稲作法等について古文獻からの詳かな徵証を求めた。而して特に稲米に關して種々の呪術や、宗教的呪術が實修されたことについて論究した。また、「第八章」モルガンの謂う雑交・雑婚は行われたと見ず、血縁家族的共同婚、もしくはこれに近似した形態は我が國にも行われたと考えた。異母兄弟姉妹間の婚姻は自由であるが、同母兄弟姉妹間では禁ぜられている所謂ブナルア式は存在したと積極的に認めている。また一夫多妻婚は普遍的というよりは、遍在したと見、北方系の神が多妻であることに注目し、事實一妻多夫型は推定に困難であるとした。この外、結婚方式について、掠奪婚は古文獻の記述が見当らぬとし、購買婚は普遍性を持つ型とした。また、労役婚については古典神話も古典歌も証左を示していないとした。「第九章」末子相続制については、原始時代の早期に我が國では廃れかけてをり、説話の変容の中に、長子制への推移が読みとられるとした。また、「第十章」母系制と父系制については、母系制が古くから行われ、父系制は、「より新米」であるといひ表わし、カヅとしての父は、家庭では一つの out-stider 以上のものでない事を認め、子女は母の trouble と観ぜられた文化期のあつたことを考え、母刀自の權能の大は、大伴氏内に於ける坂上郎女に見た。そして、この母系制にかわつて父系制の進出があつたことを、孝徳天皇の朝に制定せられた、「男女の法」の中に見る

論究を試みた所である。また、言語学・考古学的な文献を渉獵して傍証これつとめたことは、人間の眞実を愛する学者として、その熱意の強さ、精力の絶倫さ、全く驚嘆の外はない。この意味では、日本の古代ないし原史時代に於けるほとんどあらゆる事項を網羅しているといえる。

博士が世界神話学の立場から取扱つた外国文献は莫大な数に上つているが、この書に於ては、ただに神話学に関するのみならず、広く民族学の分野にまで及んだことは、大きな特色となつてゐる。その意味では、世界史としての神話学・民俗学ないし民族学、及び社会人類学に関する殆んどあらゆる事項が取上げられてゐるという観がある。この意味でも矢張り世界史的立場に立つ古代史の集大成としての印象を与えている。

こういう方法については書中博士が屢々言及した所で、「内深法的・民俗学的な行き方と、外伸法的・民族的な行き方を併せ用」と言つたり（巻四、三一七頁）、「自分としては、ヴントの行き方とは逆な行き方を取り、先ず第一に古文獻・民間伝承・考古学資料を凝視して、それ等が説示するところの實際の事實を学び取ることにした。……論ずる所は、實際の事實に定礎されてゐることを究明の第一義とした」（巻四、四七二頁）といつたりして、究極する所は、「實際の事實」ということに焦点が向けられたのは、博士の畢生の労作の帰結であるといえよう。

もとより、こういう態度を私はよくないと難するものではない。然し通読して我々は何か一つの不安に陥るのである。それは、神話の学問の行方についてである。博士の論旨が確實性を得るには、多

くの学問の分野からの支持を求めめることは毫も差支えない。けれど神話の学問その物から来る確率というものは、それだけ弱くなつてゐると見ることは出来る。神話学をめぐる諸学問の確實性というものによつて、神話の学問が支持せられてゐる印象がある。多くの先人・後人の論考を否定して行くその過程の中に、自説の主張をするというこの書の取つてゐる記述の体の中に既にこの事があるのである。私は、矢張り、神話の学問が独自の自主的立場で、一つのまとまつた客観性を持つた考を立てる事は出来ると思う。例えば、第四巻に於ける、チ・タマ・カミの三靈格観に関する論考のごときは非常によい例である。私はこういう部分に、ほんとうの博士の神話学者としての独自の立場を認めることが出来、このような取扱いは何人と雖も追隨することの出来ぬ、そして神話学のみが誇ることの出来る学問の境地であると思うのである。

博士は好んで、日本民族構成要素としての北方系民族と南方系民族の事を言うが、神話の学問は飽くまで精神現象を対象としてゐるので、神話は歴史事實や、歴史事實の實體を直接云為してゐるものではない。それは、博士自ら、「古典的体系神話は、我が國に於ける原史時代、若しくは、それに先住する時代の心的産果である」（巻四、一六二頁）といつてゐるのを引き合ひに出すまでもない。神話の学問はその意味では、古代人の意識を取扱う、精神史であつてよい。具體的な民族の事實は、民族学ないし人類学が樹立したものである。博士のこの大著は、その意味では、神話の学問が大きな人間学 Anthropology としての歴史学の中に没入した感がある。博士が、「我々はよりよき拠所として、考古学的・先史学的な資料、

及び民間伝承に眼を注がなくてはならぬ。……ただ遺憾な事には、自分はこうした資料や伝承を誤りなく使用する適格者ではない。だからここには、さうしたものの妥当な駆使がこの問題の解明に大きな役を演ずるだろうという提言をなすだけにとどめて置く」（古代の主要食料としての稲米、第四巻、五五〇頁）とのべているのは、この事である。

然し、そうは言うものの、実を言えば、この「日本神話の研究」の立場は世界の学問の趨帰であり、運命であるとも言える。博士が、最後まで神話学の中にのみ住む必要はないのである。（第一巻 序 説篇 A5判 本文五一五頁 外に著者索引 一般事項索引付 定価一二〇〇円、第二巻 個分的研究篇上 A5判 本文六三四頁 外に著者索引 一般事項索引付 定価一三〇〇円、第三巻 個分的研究篇下 A5判 本文八〇四頁 外に著者索引 一般事項索引付 定価一五〇〇円、第四巻 総合研究篇 A5判 本文八八八頁 外に著者索引 一般事項索引付 定価一六〇〇円 東京 培風館発行）

北山茂夫著

日本古代政治史の研究

直木孝次郎

一

民衆の歴史を明らかにせよ、ということとは、戦後の歴史学界の大きな潮流の一つであつた。社会経済史学や考古学、民俗学が異常といつてよいほどの隆盛をみた原因の一つは、ここにある。支配階級を中心とした政治史や文化史に対する反省として、それは戦後における当然かつ正当の現象といつてよい。しかしいうまでもなく、民衆に支配階級の権力に対応するものとして存在する。政治を動かし、政治に動かされるものとしてつかまなければ、民衆の歴史は生命を持たないであろう。民衆を忘れた歴史学が真の歴史ではありえないように、権力との対応関係を捨象した社会経済史や社会構成史は、歴史学の必要な一部門ではあつても、完成した歴史とはいえないと思う。

このようなことは、理論として述べるのはやさしいが、一つの時代について研究を実際にまとめることは、実に困難である。日本古代史についていうと、戦前に滝川政次郎氏の『法制史上より見たる日本農民の生活、律令時代』や、沢田吾一氏の『奈良朝時代民生経済